

『1968』沈黙破る力

同書主題のシンポジウム
当事者2氏「評価」



歴史社会学者・小熊英二氏の2千坪にわたる大著『1968』（上下巻、新曜社）が、発売4カ月で2万部に達している。60年代末に起きた

「反乱」の意味を考察した書。賛辞を集める一方、当事者から事実関係などをめぐる批判も噴き出し、「事件」とも呼べる様相をみせている。

今月初め、同書をテーマとするシンポジウムが東京・白金の明治学院大学で開かれた。タイトルは「1968年と2009年」。政治思想史研究者の原武史氏を司会に、

文芸評論家の加藤典洋、作家

の高橋源一郎、島田雅彦、両宮処凛の4氏が討議した。世代でも思想も多彩な顔ぶれの

中、新鮮だったのは当事者世代である2氏の発言だった。「良い本でした。自分が経験したことが鳥瞰トリキョクされている」（加藤氏48年生まれ）

「一つの歴史、一つの空間、一つの巨大な事件を、ある一つのかたちで次の世代に伝えるためには、これくらい大胆にやらなければいけないのかと思った」（高橋氏51年生まれ）

「足りないもの」の散見、あっさりした記述などに不満を述べながらも、おおむね好意的に評価した。

同書の相当部分は運動参加者らの回想記などを扱っている。原氏からは、歴史研究者ならば当時の一次史料を重視すべきだったという批判もなされたが、高橋氏は、一般学生を含む「言葉をもたない人たち」の実感を描く方法として認めた。加藤氏も「くだらない情報も含む『ゴミ』が、メッセージを発している一点が魅力だとした。

事実関係に誤りがあるとの批判についても、実際に自身をめぐる記述に誤りがあったという高橋氏は、怒る気にはならないと語った。「あらゆる立場からの発言が可能で、個人の数だけ間違いがある」。そのことを受け入れる「覚悟」を示したのだ。

2009年の今から1968年に、どう向き合うのか。小熊氏は同書で、豊かな社会のなかの生きづらさを「現代的不幸」と呼び、その源を68

年に求めた。そして、当時と現代との「連続性」に意義を見いだそうと訴えた。

だが高橋氏は近代の終わりと、90年代の大変動を経たいま、68年に戻ることがありえないとし、「新しいパラダイム」の必要性を述べた。ただし、「68年」からシニカルに距離をとる姿勢とは一線を画した。当時のことを会場から尋ねられ、「10年前なら答えにくかったが」と前置きしつつ、こう返した。自分の「解決」はまだできていない。言語化できる自信もない。でも小説という「僕のやり方」で68年を伝えていきたい、と。

当事者の重い沈黙が、破られた一つある一例だろう。ならば、やはりこの大著の意義は小さくない。（藤生京子）

早稲田大学国際シンポジウム「東アジアにおける経済統合と持続的発展」 韓国、中国、シンガポールなどの論客を迎え討議する。12月4日午前10時、東京都新宿区同大学国際会議場井深大記念ホールで。無料。日英同時通訳あり。詳細は大学院アジア太平洋研究科内の事務局（03・5286・2168）。

文化

1968年と2009年



1968年と2009年

早稲田大学国際シンポジウム「東アジアにおける経済統合と持続的発展」 韓国、中国、シンガポールなどの論客を迎え討議する。12月4日午前10時、東京都新宿区同大学国際会議場井深大記念ホールで。無料。日英同時通訳あり。詳細は大学院アジア太平洋研究科内の事務局（03・5286・2168）。